

野菜産地における女性の役割と有機農業

The Role of Women as a Promotion Factor for Making up the Growing District in Vegetables, above all in Organic Farms.

坂本 英夫*

Sakamoto Hideo

1. 主としてアンケート調査によるもの

有機農業を実施している農家について165戸、全国規模でアンケート調査をおこなった。詳細は整理中であるが、判明した分については次のとおりである。

- 1) 有機作物の1位は水稲59で、ついで野菜57、果樹27、茶8、その他10であった。
- 2) 施肥は、各種の有機質肥料100、堆肥が主92、無肥料5、その他20であった。
- 3) 手が焼ける害虫はヨトウムシ30、アブラムシ17がとくに多かった。
- 4) 出荷・流通で消費者とのつながりかたは、個人直送（配達）69、援農62、生産者と消費者交歓51、が主であった。
- 5) 出荷（提携）先の所在地は、生産者のいる近くが多いが、関東の生産者は他の地方、たとえば中部や東北への出荷が多い。
- 6) 近くの人で有機農業を中止した人は経済的理由によるものが多い。
- 7) 有機農業を始めた理由について、回答項目を傾向別に整理した結果、①美味しくて、②安全な食物を作る、ということが上位に集中した。
- 8) 有機農業の普及にリーダーの必要性が欠かせないという回答が多かった。
- 9) 有機農業と高齢者・女性の従事に関して、十分やっつけられる、という回答が圧倒的に多かった。
- 10) 農村・山村の人口減少に対する有機農業の役割については、約3分の2が否定的であった。しかし、「人口減少の速度を多少とも緩める」という回答を含めて、約3分の1が肯定的であった。意外である。
- 11) 有機農業は参入者が多い一方で、離脱者も多いので、全体として実行者の数は変わらないように見える。社会的には人気があるものの、この点は問題である。
- 12) 有機農業の問題点は、非常に労働力（時間）がかかることにある。その一方で、生産量は在来の慣行農業（農業・化学肥料使用）の2～3割減であるので、経済性からみれば

不利となる。

- 13) 有機農業は病害虫対策と除草に時間がとられ、それが経営面積を制約している。およそ、2ヘクタールが上限であるとみられる。
- 14) 経済性は有機農業の推進力にはならない。別の理念が支えとならなければ、馬鹿馬鹿しくて継続できない。
- 15) 産消提携や援農の時代は過ぎ去りつつある、という見解も多い。スーパーや健康食品の店で有機野菜の販売が増える一方で、ボランティアとして活動していた主婦がパート勤務に転じて、消費者団体の受け入れ活動が不振になっている。
- 16) 生産者も自給+余剰分の流通という経営スタイルが一番安定的であり、その点からすれば、女性や定年後の男子にとっては小規模経営の有機農業は適した場であると推定される。
- 17) 消費者が若返り、理念を考えない層が出てきていることに危惧を抱いている。

2. 地域調査によるもの

数カ所について地域調査をした。とりあえず分かってきたことを報告する。

- 1) 有機農業が盛んな地域は、はじめ非農家の提唱者が現れ、ついで農家の中に実行者が出る。言と行動のリーダーがいると盛んになる。
- 2) 有機農業に従事する女性は非常に多い。夫は水田経営（専業）とか農外兼業に従事し夫人が有機農業をおこなう形態が多い。
- 3) 意欲さえあれば、女性の有機農業従事はまったく問題がない、というのが現地での反応であった。
- 4) 有機農業の必要性について、その理念が行き渡っているとされる生産者グループにおいても、経済面を優先する人達が少数ながら、存在する。
- 5) 上記の点から推定すれば、有機農業は盛んになったとしても、その地域的分布は面的にはならず、点的に散在することになる。
- 6) 計数化しにくいのが、農業における女性の主体的行動は東日本よりも、東海・瀬戸内が発とみられる。

紙幅の関係で要約化した。詳細は平成13年度奈良大学出版刊行助成による拙著『野菜園芸の産地分析』に収録してある。奈良大学図書館に所蔵。